



# 岐蘇林多

## 目次

- ▲論說
  - 新聞紙と其生命
- ▲學術
  - 苗圃面積算出の公式に就て
- ▲文苑
  - 強烈な渦中に在つても
  - 新府城懐古
  - 尾張富士祭禮の奇習
  - 山の神
  - 御嶽講
  - 北海道の友へ
- ▲和歌
  - 冬の北國より
- ▲雜報
  - 演習記事
  - 兎狩
  - 學校記事
  - 會員消息
  - 其他

(日四十月六年四十四治明) (日五廿月每)

(可認物便郵種三第) (行刊期定)

號八拾八第

日五十二月二年五正大

### 生徒募集廣告

來四月本校第一學年ニ入學セシムベキ生徒約五十名募集ス手續左ノ通り  
大正六年二月 長野縣立木曾山林學校

### ○入學手續

本校ニ入學セントスルモノハ入學願書ニ履歷書、戶籍謄本及体格検査書ヲ添へ來三月廿日迄ニ差出スベシ其様式左ノ如シ

### 入學願書(用紙美濃紙)

某儀

御校へ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書、戶籍謄本及身躰検査書相添へ此段願上候也

年月日

何府縣何郡市町村何番地居住(寄留ナラバ寄留地ヲモ記スベシ)

何府縣族稱誰子弟

入學志望者 何 某印

同上

右父母後見人 何 某印

長野縣立木曾山林學校長七宮純雄殿

### 履歷書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱戶主

又ハ誰子弟

寄留地、何府縣何郡市町村番地

何 某印

生年月日

### 學業

- 一、何年何月ヨリ何校ニ於テ何年修業又ハ卒業(證書ノ寫ヲ添フベシ)
- 一、何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就テ何學ヲ修ム等

### 賞罰

- 一、何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞又ハ罰ヲ受ク
- 右之通り相違無之候也

年月日

### 身体検査書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱寄留地、何府縣何郡市町村番地

何 某

生年月日

一 軀格 一身長 一 軀重

一 胸圍 一 中心視力(色盲) 一 聽力(耳疾)

一 痘 一 呼吸器 一 神經系

一 皮膚 一言 語

一 既往現在ノ疾病又ハ畸形 一 四肢運動障害ノ有無

右検査候處相違無之候也

年月日検査 住所 何學校醫又ハ醫師 氏名 某印

尙詳細ハ本校ニ承合セラルベシ

論 說  
新聞紙と其生命

丸山 岩吉

「新聞はもはや讀まるべきに非ず。唯瞥見するのみ」とは、一米人の言である。アメリカの各新聞は、これを真理と奉じ、それが爲めに努力した。彼の地の新聞が、事實の迅速簡明なる報導に向つて其全力を傾倒しつゝあるは、それが結果と傳へらるゝ。こは、時勢の進運上、さあらねばならぬ當然の結果なりと僕は信ずる。我國に於ても、新聞論説の權威既に昔日の如くないは誰しも認むる事實である。人生社會が甚しく多忙に趣いたは、新聞の瞥見を餘義なくする最大の原因である。しかし、アメリカの如き經濟界の活動極めて頻繁なる國にあつては、吾日本の現状に私ではまだ、新聞の讀下を許さない程、しかく多忙な人間は存しない筈である。しかるにも係らず、論説なるものが殆んど其權威を有しないとは何が故だらうか。記者の無定見、それも大いに方ある。しかし、其最大の原因は、一般的水準の高潮にある。人々は、新聞の指導によらずとも、これを自分で批評する丈の眼識を具へた。假令其論説を讀んだとしても、昔日の人の如くこれの如く其儘受け容れることをしない。こ

れを分析批判して論の正偏如何を確める。新聞紙は遂に煽動家たるものが出来なくなつた。國民を指揮する。こはつひに彼等の職分ではなくなつた。今後の人々は、自己を以つて自己を率ゐる。新聞紙は、それが思惟の、理解の、材料を供給するに過ぎん。茲に於てか新聞紙は事實の迅速正確簡明なる報導に向つて、其總てを費せよ。今後の新聞は、正にかゝるものでなければならぬ。更に讀者の方から言つて見る。今後の讀者は、新聞紙を一瞥して、其もの中より自己の興味に適ふた表題のみを見出し、これを讀む。他は棄て、顧みない。自己の興味に適ふたといふは、自己の見んと欲する其欲求の對象たり得たといふことである。しかして、何物が最もよく此欲求の對象たり得るかといへば、それは自己の生活に、最も深い、大い接觸あるものといふことにならねばならぬ。故に新聞紙にして、成る可く多くの讀者を持たんと欲せば、其記事を各方面に求る必要がある。限りある紙面に成るべく多くの事實を盛らんとするより、期せずして簡にして要を得たるの報導を取らねばならぬ。報導の迅速は、新聞紙の名の示す如く、それが根本生命である。又それの正確でふことの重大は、更に喋々すべくもない。何れに

しても、迅速、正確、簡明なる事實の報導てふことが、今後新聞紙の取るべき唯一の道で、新聞紙そのもの生命は、唯疑つて茲にある。『新聞は社會の鏡なり』此提言の事實上破産にあるは、少くも事實を知るものにあつては、容易く觀取し得る事柄である。廣大にして複雑なる人生社會を、其儘引き寫すべく、新聞紙の數頁の如何に小さく且脆きかゝる提言は、提言の最初より破れてあつた。新聞紙は唯、この人生社會に起つた事實中、比較的多くの接觸を持つものと思惟する。一部分を抽出して、これを報導するの任務しかない。能力しかない。故に新聞紙の寫す社會は、頗る事實に遠いものである。これを辨へて居ないと、往々にして、突飛極る人生觀や社會觀が作られる。一部青年の徒なる妄想も、其一部は、此新聞即社會の曲解から來る。本稿は、平素の斷片的感想を、多少統一的に書き連ねた迄に過ぎぬ。従つて何等思索的背景を持つて居ない。故に欲陥の多くが藏されてあることと思ふ。かゝる態度は頗る輕卒にして且無責任である。僕はそれを自らにして恥づ。其等の缺陷は發見次第自ら補正するてふこと、この記事の係る所すべてに向つて全責任を負ふてふことを、僕は茲で誓ひせんと欲する。

學 術

養成苗木に對する苗圃面積算出公式に就て(承前)

函 山 生

第二回目以後は前年度の劣悪苗木を山出苗として山地に送り出すが故に前年度の劣悪苗木率と次年度の劣悪苗木率とを大略相等しきものと考ふるときは第二回目以後に於ける毎年の山出苗木本數 $N_2$ は次の如し

$$N_2 = N_1 \times R.P. \dots (5)$$

前式に於て第二回床替迄を算入し第三回床替の場合を除外せるは一般に造林用苗木を養成するに當りては如何なる樹種と雖二回以上の床替を爲すの必要なく成長の遲速によりて一回若くは二回の床替を行へば充分なりと認めればなり即ち成長の緩慢なる樹種は同一の床地に据置く年數を長くすれば可なり例へばトマツの如き成長の緩慢なる樹種にありては播種後第三年目に第一回床替を行ひ第五年目に第二回の床替を行ひその翌年又は翌々年に山出苗とすれば可なり但し第二回目の床替を行はずして第一回の床替直ちに山出苗として山地に送り出す樹種にありては山出苗木本數 $N_2$ は次の如くなる

$$N_2 = N_1 \times R.P. (1 - P_a) \dots (4')$$

同様に第二回目以後に於ける毎年の山出苗木本數は次の如くなる

$$N_n = N_1 \times R.P. \dots (5')$$

次に前にも述べし如く樹種によりては播種床並に床替床に一ケ年以上据置くこと少なからず例へばトマツの如きは播種床に二ケ年間据置き床替床に二年乃至三年宛据置くを常とす今その播種床に於ける据置年數を $n_1$ を以て示し第一回床替床に於ける据置年數を $n_2$ を以て示し第二回床替床に於ける据置年數を $n_3$ を以て示すときは一般に毎年の播種量 $M$ に對する所要の床地面積 $F_k$ は次の如くなる

$$F_k = n_1 F_0 + n_2 F_1 + (n_3 + P_a) F_2 \dots (6)$$

但し第二回目の床替を行はざる樹種にありては所要の床地面積は次の如くなる

$$F_k = n_1 F_0 + (n_2 + P_a) F_1 \dots (6')$$

然れ共苗圃に於ては通常床地の外に畦畔道路等の道敷を要するが故にこれ等の道敷の面積が床地面積に對する百分率即ち道敷率を $K$ を以て示すときは一般に所要苗圃の面積 $F$ は次の如くなる

$$F = [n_1 F_0 + n_2 F_1 + (n_3 + P_a) F_2] (1 + K) \dots (7)$$

但し第二回の床替を行はずして第一回の床替直ちに山出苗として山地に送り出す場合にありては所要苗圃の面積は次の如くなる

$$F = [n_1 F_0 + (n_2 + P_a) F_1] (1 + K) \dots (7')$$

の面積を與ふる公式なり次に $x$ 本丈の山行苗木を年々養成せんとせば何程の苗圃面積を要するやと云ふに今の苗圃面積を $F_k$ を以て表はすときは次の比例式あり

$$N_2 : F_k = x : F_x$$

故に $F_x = \frac{F_k}{N_2} \times x \dots (8)$  (以下次號)

◎(訂正)第八十五號所載本題の文中に於て活字の誤植の爲めに文意に變化を來す所が二三ヶ所ありますから御訂正を願ひます

五頁中段終りより一行目「扁柏は四、六%」を四、八%と訂正なされたし

六頁中段六行目「公式なるが」を「公式なきが」とし十行目の「般公式」は「一般公式」の誤

六頁下段の(2)の公式の $F_0$ は $F_1$ の誤

六頁十五行目の、 $R.P.$ は $R.P.$ の誤り十九行目の $R.P.R.P.$ の誤

文 苑

強烈な渦中に在つても

岩 田 生

朝と晩とに隣村の寺の鐘の音が聞れる。それは朝も晩も同じ僧が同ト堂で同が鐘を撞くのだ。鐘は撞かれて振動し空氣に音波

を起してそれが私共の耳に達する、そして鼓膜に觸れて聽神經が之に感じて、聽覺を起させる、これまでの経過は朝の鐘も晩の鐘も何の異るところはない、然るに曉の鐘の音の溢れるやうな歡びと光明とを感じさせるのに引かへて、夕の鐘は何となく沈んで行きさうな哀れさを思はせる、殊に除夜の鐘はあれが地獄のやうな鑄造工場で油と垢の職工達の手に依つて造られた銅と錫との混ぜ物の鳴る音だとは到底思はれないほどの神妙しさを思はせる。

ぬと共に、私共は人以上の或る大なる威力に支配されつゝあるものだ、といふ事を徹底的に無視する事は出来ぬ。科学は、水は地球の引力に依つて高きから低きに流れるものだと解き、晝夜の別を地球の自轉に由ると解き、軌道が隋圓形である爲に春夏秋冬の別を生ずることを教へ、低氣壓の高低に由つて風や雨の來襲を豫想し、空氣と水と光と熱とに依つて植物が生つ花が咲いて實が成ると教へた。

學が生んだ龍兒飛行機は一萬尺の高所に達すると騒ぐが、地球に一番近い月への平均距離は實に九萬七千八百里、尺に換算すれば十二億六千七百四十八萬八千尺である、然るに太陽への距離は實に三千八百萬里の遠きである、而もそれは大宇宙の僅少な部分ではないか、大自然は定めて人間のこの小ぼけな誇りや努力を嗤ふことであらう、自然に對して冷やかな人々は、川の流を眺めて悄然として居る者を見れば嗤ふであらう、秋風に泣き音を吐くやうでは刺戟の多い現代に一日も生活することはできぬと謂はう、世知辛い世の中に花の咲く日も月の照る夜もあつたものでないと言はう、斯く自然に對して尊崇の念の乏しい這般の人々は、自身邊の凡ての物に對しても人に對しても冷やかである。斯うして世界の所有事物を無情冷酷化して行くのである、月の世界のやうに、その原因が科學の進歩にありとすれば、科學に由つて進歩發展した社會は、又科學に由つて破壊されるものではあるまいか。

なす。かう謂うたとして、私は自然の前に跪坐平伏して、自分の小さいのを歎くものではない、又科學の進歩發展を呪ふものでもない、ただ複雑な刺戟の渦中にあつても雄大な自然と肩を並べつゝ、冥合しつゝ、眞實な一歩一歩を踏み占みつゝ進みたい。

新府城懷古

甲峽の風雲を叱咤しては毅を富嶽と競ひ、四隣の諸侯を睥睨しては勇を富川に誇りし機山公、忽として陣中に歿し野田城頭笛聲寒き夕、誰か知らん燦爛たる歴史を有する甲斐源氏の行末を案じ煩ふ老臣宿將の背後に凄愴なる冷笑を洩らす惡鬼の獨り暗中に跳梁して嘯くあるを。

浪々子

今は敵旌境上に驍り、故公の豪骨尙冷めやらすして盾無の寶鏡早くも朽ちんとす。城壁未だ乾かず塹壕尙全からず、而も勇士離散し宿將歿死して守るは雜兵僅に七百、他に頼るなき新府の孤城、敵軍潮の如く殺倒せん時、誰か能く一戦して敵を城外百里に擊退し得るものぞ。吁今にして始めて知る乃父の訓、士卒は我が城廓なり士卒を措きて何れにか城廓を求めん。

の面影に無限の哀愁深ふを、見よ四百の馬聲を呑み盡きの恨を萬天の煙に放つを、小暗き森を駈け出だしたる女人の一群、廿歳の花恥かしき面を被衣に裏みたる勝頼夫人を擁せり。痛ましや紅閨の中翠帳の下娥眉深く鎖して柳腰風に當らず、綾羅の袖空焚の香に埋れて糸竹管弦の外には手に觸れさせ給ふものも無かりし御身の、今日は乗り慣はぬ荒馬を召され覺束なくも出でたれける。

(完)

尾張富士祭禮に於ける風習

梶田實治

尾張富士は孤峯最高く遠くは駿河の土峯を望み近くは入鹿の大池を見下し尾三濃信の連山一帯に盡きて風光無双の佳境たり凡擬富士は諸國にありと雖も皆其形によりて名村たるを此富士は左にあらす昔近江の土を運びて湖と富士とを造り一時擔夫の神此地にて一簣を覆ししが則此山となりたりされは彼駿河の富士山と同じ土石なりと古籍に見ゆ富士淺間の祭に一つの面白き風習あり四月九月十一月の初申日及六月朔日は其例祭にして就中六月朔日は殊に大祭なり五月晦日の夜より雲霞の如き群集は山上山下に集ひ大篝を夥しく焚き是れを囲み或は興じ或は叫びて騒ぎ合ふ炎々たる焰は彼等の面に映り赤鬼の如く夜叉の如しされど此篝火を遠き所より望めば紅の花にまがひて美觀を呈し如意ヶ嶽の大文字に彷彿たり又急峻なる前坂よりは貴賤の若者足袋草鞋にて足を固め筒袖襦袢を着二尺五寸の晒手拭にて向鉢巻固く締め己が姓を彫りたる塚の如き大石を藤蔓もて結び音頭の調子につれてエシヤ／＼の節面白く峰に向つて引上げゆく障害たる砂礫は石の重量にて跳ね起され坂を矢の如く走り麓の池に其影を没す斯くして引上げられたる大石は峰に積み重ねられ若者は一同社前に整列し拍手豊かに打

ちて神を拜し再び麓に下りて又他石を引上げ幾回となく同じ事を繰り返し東天はのぼると白くまたく星の影うすくなる頃に至りて終る翌朝静かに此の跡を見れば急坂は破壊せられ鬱々たる樹木は枝を裂かれて其跡白く生木の篝火は燃え残りて無情を朝風に訴ふる如く淡き煙を靡かせ居るはいと哀れなりそも本社祭神木花開耶姫命は常に國狹穂尊を祭れる本州第一の高山本宮山峰よりとも我が峯を高くせしものには大なる幸福を垂れ給ふと聞くされば人々競うて幾百金を抛ち遠國より態々大石を求め來たりて御神に献す又前の石引に參加せざる參詣人は御供料に更に供へず只己が年に等しき石敷を屋敷附近より拾ひ來たりて神がまします社前に積み重ね幸を希ふ習慣は今に於けるも變らず嗚呼林木の成長に適する肥沃の峯も數年経ずして石峰と化し遂に慘澹たる荒廢を見るべし蓋し我が國は全陸地の七割を占むる山地ありて世界第一林業國の尊稱を受けざるは畢竟かゝる奇神のまします所以なりと思へば口惜しくまた惜し

我が故郷大門村の十七日の山の神

二年 内 由 白 菊

陸月十七日も入相鐘につれて暮色は峯からしりしき谷間におもむく白い屋根の眞黒

な煙出から軒端から、ほわほわと立つ紫色の煙と和して、谷谷の部落、部落の上を、春の霞が外山の山何に、棚引く様に村落を、ぼろと纏う頃、チャ／＼と、騒しく雀の啼く家近くの果樹或は、園木の梢に、小さい弓二つ、それに、ふさわしい、矢四本を、たばね、その弓の下の端に、かんじんよりで洗米を包んだ、包みを、提灯のトに重りの様に、吊るしてあるのが見える。これは、祖先傳來の遺風で、僕の部落では、部落の東南、秋葉山麓の、あの樺が二三本に、花柏が混じつてゐる、あの、こんもりとした森に、鎮座します、山の神にあげ、供物だ、ううだ。僕等の小學校へ、通つてゐる時代には、道邊の、柿の木や、梅の木等に吊るしてあるのを、競争して取つて其あげ、じりや、この野郎共、なぞ、どなられた。弓は矢も、若しくは裁で作る、矢の羽は、ツケ木を切つて、羽根の様に筆で模様を書き、つるは、元結だ、これを、たばね、洗米を包んで、家の東方の木に吊るすのだが、東方に、木のないう家は、方位を定めまいで吊るす、家の周圍に、全く木の無い家は、棒を立て、其れに吊るして、供へる。夕食には何處の家でも、主人は、山の神講の、當番の家に集合して、各々神前に御頭を、先づ吾々家の幸福を願ひ、次に、己の講を加護せらるゝ様祈り、後、講の一年の計畫及方針を定めてうたげを催うすのだ、

ちの、うたげの御馳走は當番が出すのだが身分相應にせぬと爪弾きをされるのだ、而し儉約は意に止めない。僕の部落には、大當、小當の二組があつて集る所も二ヶ所だ、それで、或家に吉凶の事起り人手を要する時は、其の當中の一人これを助けてやるのである、うれでも、未だ人手の少ない時には、其家が大當の家なれば小當が又、助けるのである。斯くの如く、互の利益を計り、出る杭は打たるゝなごといふ事は棄にしたくもない、其の親睦の有様は、よりの見る目も、うらやましめ程だ。

かくして、春もすぎ、夏も暮れ、秋も去つて、冬も師走の十七日となれば、又、次の當の所に集り、山の神に一年の加護を謝し、然る後、年内の出来事に対する批評、及、將來の希望等を各々述べて宴を開いて御馳走の餘を手に千鳥足して家路を急ぐのだ。(完)

御嶽講

池口 福雄

吾が郷には古へより、御嶽講なるものありこは信飛の境に登ゆる御嶽山に祀れる神を崇拜する人々の集合なり。郷人は昔此の中に入りて、以て神を敬し、自己の行を慎みつゝあり。毎年舊曆睡月中旬に人々集ひて祈禱をなす。其祈禱たるや。來るべき一年の幸福を祈り又自己の過を省みて心を改む

るを以て目的をす。余嘗て此の祈禱を見たるに講中多年の修業を積める人垢離と湯水、鹽にて三度其身を潔め、以て一心神に祈り「神の告げ」をて未來の事を人々に告ぐ世人若し之を聞かば、或は「うは着實なる農民を惑はす妖言なり」として一も二もなく之を否定するものあらん。然れども此の神告や他日に於て全く適中するは實に奇と云ふべし。又此の祈禱は極めて神聖なるものにして、一度其處に至れば心身自から潔きを覺ゆ而して其静寂、壯嚴なる事、身は宛ら仙境に在るの思ひす、神前に立てる人は、眼光炯々として人の肺肝を穿つが如く、其威の凜々たる宛ら生ける不動明王に異ならず。實に一心不亂の状態は斯くもあるかと驚かざるなりかくて吾が村民は常に念頭に神なるものを有つ、故に殆ど擇言なく、擇行なく、毫も怠惰なる事なし、蓋し「正直の頭に神宿る」ものと云ふべし。高象口を嚙みて殆ど生意を見る能はざる、嚴冬の候氷を碎きて沐浴し、身心を潔め、以て神に祈るこれ確固たる信念を有せざる輩には到底爲し難き事なり。世人動もすれば神を信じ、佛を敬ふ者あれば即ち迷信者なりと叫ぶ者あり。こは正鵠を得たる説なるか。神を敬ふは必ずしも神に依頼するに非ず宛も神前に掲げたる鏡

風を聞きつゝ、北海道の支へ

長谷部君

長らく失禮致しました。月日は水と流れ嵐と散り君と石の様な堅い握手をしてお別れ致しましてから早や十ヶ月も立ち淋しい内にもホープに満ちた六年を迎へました。

長谷部君

私は想像します北海道と云へば北のはるか北です今頃は雪のシーズンでしょう。うして深い、雪にどぎざされておもしろい野も山も。一文にも餘る水柱は軒につらなうてかすかに夕日が紫水晶の如くほのめいてゐる事でしょう。

長谷部君

私は身を切る様な北風が風の如く又暴風雨の如くあの暗い、うすを巻いた海から吹き寄する遠鳴の如く音をつづけて來る中に君の奮勵努力なされてゐる影がドリームの様に目にちらつきます。

長谷部君

北海道の眠れる山の使命神の使命を美しく完全に遂行されるのは君等諸君の如何なるものと云へども通す様な太い鐵腕に下つてゐる事と思ひます。

うして君のホープはコバルト色のすんだ空を白帆が油を流した様な大海原に向つて矢の如く進んで行くのに譬へたくあります君のアイデアは岐蘇川の水の如く清く富士の嶺につもれる白雪の如く美しく輝やいてゐる事と思ひます。

長谷部君 私は底力あるねばり強き執拗なる意志のシンボルとして蛇を愛し耐久の意志をスネークの如くならしめんと希つてゐます  
うしてニイチエの説の如く徹底力ある根本的生活を立てて新しいスタートに昇らん事をハートに祈つてゐます。

長谷部君 木曾路の春はもの淋しくあります死人の手の様な冷やかな空気は空一面に彌漫し押し追つた暗い空はたれず粉雪をまひ落し御嶽山おろしもの淋しいサタンの様な風は空を吹き渡つてゐますうしてその餘波は折々杭の原の高臺をかすめて校庭に流れこみポプラの枝はザザと悲しい音を立て、敗者の哀をかたり来るべき日の悲しい運命のロマンスを暗示してゐます。

長谷部君 二月と云へば中々しみませ朝から晩迄小刀の刃の如く  
うして風はこゝその差別なく吹きまくります御からだ御大切に。

和歌 冬の北國より

華村生

今日も亦異の風にあふられて蝦夷が島には吹雪するなり  
ひねもすを降り盡したる雪止みて月出し蝦夷の夜のうるはし  
山川は皆白雪に包まれて蝦夷が深山に熊のなくなる  
雪上を走る馬橋の鈴の音の暮れ行く街に寒きこゆる  
軒場より長く下れる大氷柱に夕日さんらんと輝けるかも  
野山皆雪に埋もれし空低く百千の鳥群れなして飛ぶ  
温き故郷の風の吹き来ると思はれしかな今日の冬の日  
歌かるた讀む聲も長閑に開ゆなり温泉場の冬の日の午後  
(長谷部君と登別温泉に遊びて)

發火演習記事

岩田生

征討途

雑報

と尖兵の左側に小田小隊を延伸し暫時輸贏を争ふ程にさしも頑強なる敵も遂に耐へ得ずこの高地を撤退せり。

上田小學校前の臺地占領  
されど敵が命と恃む重要地點は之にあらざして上田小學校前の臺地なり、我中隊は前の高地占領の餘勢を驅つて此處をも一舉に拔かんと息巻きしがこは無謀の策にてありし。此の地や展望極めてよく前方廣坦なるを以て我の據るべき所なし、敵は此處を固守して大いに我を弄せんと待てり。

中隊長は先づ對岸の宮島小隊をして強攻撃をなさしめこの機に乗じ、長坂小隊に命じて敵の左側の小山を忍び攀ぢ不意撃ちをすれば敵は周章狼狽此の地を捨て、潰走せりすはこゝろ中央小田小隊は中仙道を突進して難なくこの臺地を占領せり。

血戦

一度此の地を捨てたる敵は猶此處に未練を残し且つ我を一部隊のみと見誤り執拗に轉じて逆襲を試みぬ、小賢しき敵の振舞よと憤激せる我小田、長坂の兩小隊は之に應じ茲に兩軍水の如き白刃を閃して凄慘無比の白兵戦を演ずること暫時、遂に敵は大傷手を受けて退却せり。

而して宮島小隊は最初多大の損害を蒙りたれども此の要害地占領には大なる効を奏し畢竟同隊の迂回運動は有利なりし。  
増水せる木曾川の徒渉

夜來の妖雲霽れやらす蕭條たる蘇峽の天地今朝に至りて頓に凄愴の氣加はるを覺ゆ宜なる哉日頃鍛練の體が今日こそ晴れの戦なれと其意氣は天を衝き其の勇は地を壓し沈黙の山河は今や殺氣横溢の戰場と化せんとはするなり。  
十二月十二日八時半の鐘に凜々しく武装せる健兒百五十は東(假想敵、一年生全部及三年生の一部)西(歩兵一箇中隊、中隊長岩田、第一小隊長長坂、第二小隊長宮島、第三小隊長小田、三年の大部二年全部)の二軍に分れて霜沓ゆる校庭に整列せり、聽て福山教諭より本日の演習に關する注意了るや東軍を先に威風邊りを拂ひつ、歩武肅々泥濘を蹴て發しぬ。かくて東軍は七笑方面に向つて續行し、西軍は關所橋畔に到りて戦期の熟するを待てり。  
左に當日の戦況を記さん。

想定

我が本軍は今や大原に於て敵の大軍と對峙して盛に戦闘中なり、本中隊はそれが援助をなすべく敵の側方を攻撃し、尙出來得べくは日義の隘路は出で、軍の退路を断ち且つ交戦軍への物質の供給を杜絶すべき任務を帯びて拂曉上松を發して只今當地點に達せるなり。

遭遇戦

かくて中隊長は中隊の任務及狀況の説明を終るや直ちに戦闘準備に移れり、先づ長

宮島小隊は此の突撃に加はらんと荒神橋に來れるに、あはれ狡猾なる敵は退却に先立ちてこの橋を破壊せり、依て下流なる人喰橋に迂回せるに何たる不幸ぞ、之亦先日喰橋に墜落して空ければ同隊の進退此處の洪水に墜落して空ければ同隊の進退此處に谷まれり、然るに勇敢なる宮島小隊長は「泳ぎ渡れ」と命令一下し、身を挺して先頭となり折柄前日の雨に増水せる木曾川に躍り入れば、木曾川の先陣は我れなりと續いてこの急流さして飛び入りぬ。

講評

臺地の血戦の後、休戦の命令下り、兩軍此處に會して二先干戈を收め死屍累々せる邊りに立ちて福山教諭より戦闘經過に就きて講評を聞けり

第二戰

敵の大部の退ける後、右方の山麓に敵の収容部隊らしきものを認め小田小隊に命じて中仙道を急行し之を捕獲せんとす、されど敵もさるもの、かくと察知せるにや已に遁奔してその踪跡を晦ませり、かくて敵は長驅して正澤を渡り對岸なる七笑橋左方の高地に陣を布き我を邀撃せんとせり

川畔の高地占領

時に宮島小隊は未だ來らず、されば之に對峙するは先の白兵戦に尠からざる勢力を失せる二ヶ小隊のみなれば尋常の對戦にては此の地の攻略は覺束なし、依て第一小隊は敵の左側を壓して稍怯めるに乗つて第一

坂小隊をして尖兵の任務に服さしめ爾餘の小隊はその後方約三百米を進行せり、かくて本隊が關所橋の東方約二百五十米の地點に達したる時早くも尖兵より「敵の斥候二名露る」との飛報あり、續いて「敵の歩兵約二百に遭遇せり」との報告に接す、其時既に我尖兵はそれに向つて戦火を開き銃聲般々として轟けり。  
蓋し敵は我が中隊を大原方面に在る敵の主力にまで牽引して其處にて一舉勦滅を企圖せるものゝ如かりし

宮島小隊の迂回運動

而して最初我が尖兵が敵の部隊に遭遇せる地點は右方に急峻なる山峙ち左方に木曾川迫りて恰も咽喉をなし而も敵の防勢稍々鞏固なるを以てこの隘路を全中隊が通過すれば側肩躡足して行動自由ならず且つ敵の右側を衝かぬが爲中隊長は宮島小隊をして關所橋より迂回せしめたり、然るに敵は案外脆かりき、我尖兵の優勢なる攻撃に遇ひ右方の丘陵にまで退却し此處に固守して我尖兵に向つて猛烈なる鐵火を注ぎぬ、此の丘陵や前方に一帶の田圃開けて何等の地物なく攻勢最も困難なる場所たり、漸くにして宮島小隊は對岸に露る、されど彼方も一の庇陰なき山腹なれば同小隊は其の小徑を通過する間に多大の損害を蒙れり。

高地占領

敵が對岸に向つて全力を集中せる機に乗

小隊掩護射撃の下に小田小隊は正澤を渡渉して幸くも之を占領せり。時に腰以下ズブ濡の宮嶋小隊は駈足にて着せり、時恰も妖雲天を蔽ふ風霧吹雪烈しく硝煙地に漲り、天地晦冥敵も味方も分かずなりぬ、正午休戦命令一下するや各畦に身を横へて腰なる糧食開きて飢を醫す。

第三戰 間諜の報告 晝食半に間諜より次の報告に接しぬ、「敵の歩兵約五百、大原の交戦軍に参加すべく本朝鹽尻を發し、午後一時には着すべし」とされば本中隊は彼に先立ちて日義の隘路に出で其處に拒止せざるべからず、乃ち宮嶋小隊をして先づ該方面に向はしめ爾餘の小隊は左側の敵を壓しつゝ該路に出でんと攻撃を續行せり。

牽制運動 此の時大原なる敵の本軍は、歩兵約二百を割きて右方の丘陵より我中隊の側方を猛烈に攻撃せるを以て遂に隘路閉塞の目的を達すること能はざりき。

然れ共我が中隊の究竟の目的は、對戦中の本軍の援助にあれば敵の本軍をして此の二百の兵を割かしめたるは我本軍にとりて此上なき利益なり、されば本中隊は強ひて不利なる競り合をなすの愚を止め、退却の態度を示して敵を牽制するの有利なるに若か

す、依て宮嶋小隊は七笑左方の中仙道上にありて敵の全部を引受け我中隊の退却を安全ならしめ續いて同小隊も引き揚げ敵の進撃と交戦しつゝ徐々に上田方面に誘引しぬ。

最後の血戦 かくて小學校前方の臺地にまで誘き寄せ敵の接近するを待ち、全線一舉して奮撃突進し今や兩軍は最後の決戦に喊聲轟々、銃劍閃々、屍山血河の大修羅場と化せんとする一刹那演習中止の命令は降下せり。兩軍干戈を收め戎衣の露を拂ひて中仙道上に集合せるは午後二時なりき。

人員檢閲を終りて、福山教諭より本日の戦闘經過に就きて講評あり特に「得て御祭騒となり勝の演習が、特に本年は攻防進退其機に適し極めて有意義に終れり」との贊辭ありたり。

凱旋 凱歌勇しく朝來の苦闘の跡を踏み鳴らし歸校の途に就けり、時に一天墨の如くに掻き曇り忽ち咫尺辨すべからざる大霧となれり、彈丸大霰は熱せる頬に解け掛りて健兒の意氣彌が上にも高きを覺わしめぬ。かくて眠より醒めたる四山は再び元の靜蕭に歸り、滄々たる木曾の流に銃聲喊聲永へに傳はらむ。

砲よりも重きを懼れつゝ狂せんばかりに戰場を馳驅せし中隊長殿なり記中自家功名談の如きものなしとせず、されど之も書かざれば固より意通せず、筆亦重砲よりも重きかな、呵々)

兎狩の記

遠足部 H H 生

九日の朝夫れは吾が部隊の今日の幸を示すこと歡喜の色に輝き渡つた遠く駒を望めば半は霧に鎖されて居る、見渡す限り荒涼たる山野を今日は又冬の陽に相應しからの陽氣が充分に満ちて居た此の日吾が校の兎軍攻撃の命令は早くも宮川總指揮官より下つた集合の鈴に飛び出す草鞋脚絆の二百の健兒の勇姿に校庭に現れた誰しも今日こころはの意氣込みである既にして一部隊は枚を啣みて肅々校舎の左手の山に姿を消したかくて豫定の項上にたどり着き網を張つて警戒に餘念なかつた傳令は早くも此事を本隊に報告する本隊は直ちに出發して豫定の行動を取る、待つ間程なく麓に當つて関の聲が揚つた始まつたなど思つて居ると聲が段々進んで來る人々の心は緊張し切つた本隊の突撃は益々激しく成つて來たたいらら其處へ行つたがやあ出たく黒い奴あ左へ行たうれ今少し大聲を出せ左翼はもつと進め嶺の方へ逃げて行つたがなど、怒鳴つて居るやがて樹叢が鳴つて

覗く鼻先きへ淡褐色の兎公がちらりと思はず網へ飛び込んで二三回網ながらに筋斗翻りをやつたうれと計り附近に警戒して居た者がステッキを振り上げて一本見舞はんとして刹那無念や彼は網を破つて向ふの山へ逸して仕舞つた、落膽して居ると上の方で又出たくと叫んだが之もマンマと逃がして仕舞つた併し本隊よりは既に一頭捕獲せしとの吉報を得たので一同喜色満面であつた、誰が捕つた新家先生が、併し最初は信じ得ぬ者があつた夫れは平素蟲も殺さぬ様な修身の先生の事であつたからである電光石火の如き脱兎の上に棒も折れよと計り打ち下した時又鮮血淋漓として枯草を染めて息絶わな彼を右手に提げた時あゝ其時の御顔が拜したかつた、捕獲された兎を見た一同は意氣大に昂つた此時休戦の命令下り各自枯草や小松を敷いて休んだかくて更に第二回の背面攻撃の命令が下つた本隊は又しても聲を潜めて二手に分れ谷間を下つて陣取つた暫くすると麓の方から相圖があつて號令一下諸隊齊しく進んだ喊聲は山を動かし谷に響いて凄くかつたが兎もさるもの脱兎の特技を發揮して重圍の中を逸出して仕舞た依つて宮川總指揮官は第三回戦を計畫し山上より木曾川めがけて幕直に追ひ下す事としたが此度も獲物はなかつた仍て停戦を宣し全軍凱歌を揚げて歸校した寄宿舎炊事室では今日奮闘の將士を犒ふべく既にく

用意が整つて居た加之捕獲された兎は早くも料理人の手に渡つて鍋の中に收められたかくて午後一時食堂は開かれて一同が續々と押しかける高峯遠足副部長の開辭により各自箸を手にした縦横に奔馳した勇士の空腹は次第に膨脹して功名談不覺談に花が咲く頃校友會万歳の聲が抗の原々頭に響き渡つて閉會したのは赤き斜陽が白皚々たる駒に反射する頃であつた。(終)

學校記事

加藤書記退職 加藤書記は一身上の都合により一月十日限本校書記を辭し名古屋電燈株式會社に入社せられたり  
矢幡書記新任 加藤書記後任として一月三十日左の通り任命あり二月二日講堂に於て新任の披露ありたり

矢幡 三十郎

長野縣立木曾山林學校書記心得ヲ命ズ 月俸二十三圓給與

福嶋町宇山上の火災 一月三十一日午後二時福嶋町宇山上製糸工場より出火附近十數戸を延焼せり我校は恰も授業中なりしが警報に接するや直ちに全生徒を急派して消防に従事せしめ午後四時鎮火を待ちて歸校せしめたり

兎狩 校友會遠足部年中行事の一なる兎狩は二月九日新開村地籍の山に於て舉行百五十の健兒は山頂に網を張り左右及下方よ

を包圍し喊聲を揚げて兎軍を驅逐せるが第一回包圍の際二兎を逸して一兎を獲第二回には一兎を驅逐して惜しくも之を逸出せしめたり最後には網によらず山上より狩り立てたるも狡兎遠く逸して影を止めず依て兩獲せる兎を陣頭に擔ぎ全軍意氣軒昂學校に凱旋し例に依て寄宿舎食堂に於て肉汁の饗應ありしが其日の獲物も即坐に料理せられて各勇士の腹を肥やし校友會の萬歳を三唱して解散せり

長野縣立木曾山林學校擊劍教師ヲ囑托ス 年手當五十圓給與

里見教師は松本の入現に松本警察署擊劍教師として令名あり各地警察署に出張して劍道の指南をなす外尚松本商業學校其他各地青年會にも出でて教導せられつゝあり我校の爲には月二回出張指導せらるゝ等なり

里見擊劍教師就任挨拶 二月十九日午後里見教師來校せるを以て放課後講堂に於て七宮校長より生徒一同に紹介し里見教師の

挨拶あり終て直ちに基本教授をなし尙劍道の心得に就て訓示する處あり薄暮解散せり

通信欄

○柘植五郎君より(會長宛)

(前略)當北海の地此夕張の如き例年に比して温く且降雪も少しとの話に有之候併し始めて來りし吾々には總てが珍らしく少雪とは申乍ら目下積雪二尺に及び天地総て白皚々として荒涼たる光景を呈し居候餓わたる鳥の數千羽群をなして飛び雪上を馬橋の鈴の音寒く聞けて走るも又寒國ならでは見られぬ圖に候(中略)昨今漸く少しは官界の事情も判り申候北海道に於ける御料局殊に當夕張の如き林業のみに無之農地甚だ多く尙宅地鑛業用地甚だ多く事務複雑致居り恰も内地に於ける町村役場の事務を執る如き感有之候又未開の地とて道路不完全なる農村有之候爲め道路の設計架橋の設計等屢々に土木學の素養も必要を感じ申候(下略)

會員消息

- 加藤清一君 一月六日付を以て山梨縣並崎恩賜財産管理課出張所勤務を命せらる
- 柳澤得衛君 前號所報の通り同氏は栃木縣林業技手(月俸十七圓給與)に任せらる
- 平田實君 千葉縣久留里小林區署に赴任せらる
- 代田文之助君 石川縣石川郡林業技手に轉任せらる(月俸二十三圓)

○吉川眞夫君 今回秋田縣大曲小林區署を辭し明治神宮造營局林苑掛雇として赴任せらる

○林務講習 本年度林務講習に出席のものは松本小林區署の安藤次郎君、長崎千万一君、新發田小林區署の千田政美君、新庄小林區署の小林哲三君、能代小林區署の松澤敏男君

○早川一雄君 今回山梨縣管理課齋澤出張所に轉任せらる

○竹原久治君 今回古澤と改姓せらる

○市川潔君 今回三留野帝林出張所に轉任せらる

○大嶋角藏君 妻籠帝林出張所へ轉任せらる

○岡西謙三君 野尻帝林出張所へ轉任せらる

○佐々木久一君 千葉縣久留里小林區署に赴任せらる

○昨年十二月號卒業生名簿中第九回の分手違にて數名の遺漏を生じ候間左に補ひ置き候

- 帝林、湯舟澤出張所 杉本直郎
- 帝林、三留野出張所 山村克人
- 帝林、高野農林學校 小田秀一
- 帝林、三留野出張所 小田秀一
- 兵庫縣神崎郡砥堀村内仁豊野村多田慶次郎
- 山梨縣恩賜縣有財産管理課齋澤出張所 西尾嘉一
- 帝林、葦原出張所 丸山久雄

愛媛縣宇摩郡役所 佐藤一郎

下高井郡穂波村 山本政之丞

松本小林區署 高野薰見

山梨縣北都留郡役所 安藤次郎

鳥取縣東伯郡山本村小林區署 前田正義

樺太大泊王子製紙株式會社 伊藤昇次

青森縣川内小林區署 篠原爲一

伊藤德之丞

林友代領收報告 吉村金治郎君

金壹圓 澤柳壽夫君

金五拾錢 今井武雄君

第五拾錢 佐々木久一君

金五拾錢 萩原惠治君

小計貳圓 柳澤止之進君

振替口座番號 東京一七六〇〇 長野縣立木曾山林學校

大正六年二月廿三日印刷

大正六年二月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 編纂兼發行人 安井正夫

長野市西後町丙二十一番地 印刷者 田中彌助

長野市四後町乙二十一番地 印刷所 長野新聞社活版部

長野縣西筑摩郡福島町二八九番地 發行所 豐澤書店